

お正月と初詣

ご縁のある皆様方、明けましておめでとうございます。

さて、今年の干支は「丙・申（ひのえ・さる）」という事になります。『十干』は樹木の成長（生命消長の循環過程を分説したもの）に例えられていますが、「丙」は《形が明らかになってくる頃》という意味が込められています。

●【申という字の成り立ち】

子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥と続く『えと』十二支の九番目に当たる今年の「申」という字は、稲妻の形で、左右に光が屈折している形を縦線の横に並べて「申」という形になったといわれています。この稲妻は天の神の威光を表した形で、神の発するものであるという考えから「かみ」の意味となり、「申」が「神」の元の字になったそうです。「申」の本来の読みは「しん」。これを「サル」としたのは、無学の庶民に干支を浸透させるため、動物の名前を当てたものであります。が、順番や選ばれた理由は定かではありません。

人間に似ている猿は、古代エジプトや中国など世界各地で神聖なもの、神秘的なものと考えられてきました。日本でもニホンザルを神の使いと捉えた例がたくさんあります。

また猿は「去る」に通じるため、難が去ると信じられていたようです。なお、猿を俗に「えて公」と言うのは、「去る」を「得手」と言い換えた忌み言葉の一つだったのですね。

●【見る・聞かざる・言わざる】

三猿のモチーフを調べると、古くから世界各地にあった事が分かりました。日本へは中国を経由して漢語の「不見、不聞、不言」を訳した仏教天台宗の教えとして伝わり、日本で最も有名な三猿といえは日光東照宮の三猿で、神馬をつなぐ神厩舎（しんきゅうしや）に彫られています（猿が馬の守護神とされているため）。この三猿は、ストーリー性のある八面の彫刻で構成されています。一面：母猿が手をかざして子猿の将来を見ている。二面：三匹の猿がそれぞれ耳、口、目をふさいでいる。三面：座っている猿の姿。一人立ち直前の姿。四面：猿は大きな志を抱いて天を仰ぐ。青い雲が「青雲の志」を暗示。五面：《人生》には崖っぷちに立つ時もあり、迷い悩む仲間を励ます友がいる。六面：物思いにふけっている姿（恋に悩んでいるとか）。七面：結婚した二匹の猿。大きな荒波の彫刻は、これから夫婦で乗り越えてほしい。八面：最後はお腹の大きな猿が描かれています。やがて母親になって一場面へと戻り、そして繰り返されていきます。猿の一生をモチーフに描きながら、人の生き方を説くという、先人達が私達に投げかける叡智は本当に

奥深いものがありますね。そして「三猿」本来の意味は、「子どもの時は、世の中の悪いことを見たり、聞いたり、言ったりしないで、素直に真っ直ぐ育ちなさい」という教育論的な教えが示されているそうですよ。

●【お正月の由来】

そもそも、お正月とは何でしょう？「正月」は一月の別称ですが、一般的に元旦（七日）（地方によっては十五日、二十日まで）の「松の内」を指し、十五日（地方によっては二十日）の「小正月」で一連の正月行事を終えます。正月を「睦月」と呼ぶのは、お正月に一家揃って睦み合う様子を表します。お正月を家族で過ごし、おせちを食べ、お年玉のやりとりをする…というのが日本の原風景だったのが、核家族化が進んだ現代では、懐かしい古き良き日本の香りがしてきます。

元旦には「年神様（としがみさま）・歳徳神（としとくじん）」という新年の神様が一年の幸福をもたらすために、各家庭に降臨するとされています。年神様は祖霊神であり、田の神、山の神でもあるため、子孫繁栄や五穀豊穡に深く関わり、人々に健康や幸福を授けられます。各地に様々な正月行事や風習が生まれたのは、その年神様を迎え入れてお祝いし、沢山の幸せを授けてもらうために、先人達の叡智を集結して生まれた伝統といえます。考えてみると「新しい年を迎える」と表現したり、「一年の計は元旦にあり」と言

うのは、年神様を元旦にお迎えするからですね。

●【初詣は神社？お寺？】

初詣の対象は神社・寺院のいずれでもかまわないとされています。これは明治時代初期に神仏分離が行われる前は、神道と大乘仏教、ならびに祖霊信仰が一体化した『神仏習合』による信仰が一般化していた為であります。つまり、初詣に限らず神社への参詣に神道・仏教の区別はありませんとされていたことの名残があります。

●【初詣は神社や寺院に参拝】

年が明けてから初めて神社や寺院に参拝する行事を、初詣・初参り等と言います。一年の感謝を捧げたり、新年の無事と平安を祈願したりします。元々は「年籠（としこもり）」と言い、家長が祈願のために大晦日の夜から元日の朝にかけて氏神の社に籠る習慣でしたが、やがて年籠りは、大晦日の夜の「除夜詣」と元日の朝の「元日詣」の二つに分かれ、「元日詣」が現在の初詣の原形となりました。

江戸時代末期までの元日の社寺参拝としては、氏神に参詣したり、居住地から見て恵方にあたる社寺に参詣（恵方詣り）したりといったことが行われたようです。

一般的に、正月三が日に参拝するのを初詣と言っていますが、一月中に参拝する事を初詣とする考え方もあります。

●【満年齢と数え年】

年齢の数え方には、「満年齢」と「数え年」があります。戸籍上は『満年齢』を採用しています。ご存じのように、生まれた年を0歳として数え、以降誕生日を迎えた時に一歳を追加します。一方お寺などでは『数え年』を用います。生まれた年を一歳として数え、以降元旦を迎えた時に一歳を追加していきます。それでいくと『数え年』で面白いのが、仮に十二月三十一日に生まれた場合です。十二月三十一日に生まれた時点で既に一歳で、翌日が元旦ですので一歳加算され、生まれた翌日にその赤子は二歳になるという事になります。

日本では昔から『数え年』が使われていましたが、明治の中ごろに「年齢計算に関する法律」ができ、満年齢が推奨され、また改めて昭和二十四年に「年齢のとなえ方に関する法律」が施行され、現在に至っています。しかし、今でも儀式や宗教の場においては『数え年』が使用されています。『数え年』というのは「神仏に感謝の気持ちを表す年齢の数え方」と言えます。仏教では「子供が母さんの胎内に宿っている時から、人としての存在を認めた「命」を尊びます。元旦に分け隔てなく、皆一様に年神様からありがたく年を頂くとする『年齢の数え方』なのです。ちなみに、元旦にいただく「お年玉」とは、実は「年の魂」からきてます。



冬至水行祭恒例

パンフキンスープ&豚汁



つまり「数え年」＝「年の魂」の数え方という事になります。日本人は世界に誇る歴史や文化を沢山有している伝統ある国です。礼儀作法しかりです。家庭や学校で大人がしっかり子どもに教え伝え続けたいものです。

合掌 副住職 谷川寛敬

今年もフラの皆さんの協力の元、美味しいカボチャスープが出来ました



お昼からは、料理名人が美味しい豚汁を作ってくださいました。(約200食ふるまう!)

